
自販機で女の子が買えたらいいね

KAITO Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自販機で女の子が買えたらいいね

【コード】

N19880

【作者名】

KAITO Y

【あらすじ】

自販機の妖精？ 自販機の蛍光灯に照らされた少女と二トのおはなし。

その夜、自販機の前に座る少女を見つけたのは偶然だった。パソコンですっかり固まった体をほぐそうと近所のコンビニへ行き、適当な弁当を買ってアパートへ戻ろうと夜の住宅街を歩いているとタバコ屋の横の自販機の前に一人の少女が膝を抱えてうずくまっていた。白いワンピースに白い肌。長い銀色の髪の毛は外国人のように輝いている。年齢は13、4歳くらいだろうか。虚ろな目でボーッと何も無い空間を見つめる表情はもっと大人びて見えた。僕はそれを不思議に思ったが、見て見ぬフリをして横を通り過ぎた。それが正しい日本人の姿だ。あの子が危険な目に会おうと自分に責任は無い。そう自分に言い聞かせて、アパートに帰りテレビを見ながら夕食を食べ、パソコンを立ち上げた頃には忘れてしまっていた。

それから数日の後、人通りも無くなった深夜。こんどはコンビニへ行く途中で少女に出会った。また前と同じ格好、同じ姿勢で座っている。まるで何かを待っているようだ。僕はまた少女の方を少しだけ見てそのまま通り過ぎた。だが時刻はもう日付が変わった頃だ。あんな少女が一人でいたら危険じゃないだろうか。コンビニでまた適当な夜食を買った僕は意を決して自販機へと向かった。少女に声をかけたら自分の方が犯罪者に誤解されかねない。だが自分の心のモヤを晴らしたかったし、何よりも少女は恐ろしいほどに綺麗な顔立ちをしていた。

自販機の前にとどり着くとやはり少し緊張した。そもそも他人に声をかけるなど人生で初めてだったが、何故か僕の足は自然に少女の方へ向かっていった。

「何してるの？」

ぎこちない声で尋ねる。この声のかけ方じゃまるでナンパじゃないかと心の中で後悔した。だが少女の方は驚いて呆気にとられたよう

な顔で僕を見上げている。

「いや、別に変な意味じゃなくて、こんな時間に一人じゃ危ないよって」

すると少女は夢でも見ているかのように僕の目を覗き込んできた。

「私が見えるの？」

今度は呆気にとられたのが僕の方だった。すると少女は片手を電柱の影に入れる。するとたちまち腕が消え、自販機の蛍光灯が照らす反対側に手の先が現れた。まるで見えない布で消しているかのようだ。

「君は…」

「よく分からないけど、この自販機の照らす場所だけで見えるみたいな」

僕はまだ半信半疑だったが、少女が片足を光の届かない自販機の横に突き出して消えるのを見て何故か納得してしまった。現実に取りかいている事を夢と思つて逃避していてもしょうがない。

「いつ生まれたのかも分からない。気がついたらここに座ってたから、自分が幽霊か妖精かも分からない」

「じゃあずつと一人でここに座ってたの？」

そう聞くと少女は悲しそうに隣の自販機を指差した。

「タバコの自販機とビールの自販機。その二つにも私みたいな人がついてたの。優しいおじさんとお兄さん」

「その二人は？」

「消えちゃった。タバコのおじさんはタスポの機械を付けるために工場に行った後。ビールのお兄さんは免許証を読み取る機械を付ける工場に送られて、帰ってきたら消えてたの」

「そうなんだ…」

それは死んだと表現するべきなのだろうか。なんだか不思議な気分だった。

「でもあなたに会えて良かった。タバコのおじさんがね、時々私達が見える人がいるんだって言ってたの」

「僕は毎日ここに来られないよ」

「私が本当に存在するって証明になったから、これだけでいいのもう十分よ」

そう言うと少女はまた自販機の前に座り込み、僕に立ち去るよう言っ
て手を振った。その時タバコの自販機に客が来ていたが、やはり
彼女は見えていないようだった。

それからまた数日してコンビニに行った時、既に彼女はいなかった。
少し自販機に近付いて見ると真新しいsuicaのパネルがついて
いる。彼女も死んでしまったのだろうか。あれが夢だったのかどう
かは分からず終いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1988o/>

自販機で女の子が買えたらいいね

2010年10月9日00時17分発行